



リトルウィング支社のあるクラッド6。
その社内があるマイルームの一室。

『ナヴァちゃん・・・』

ゴージャス間溢れるとあるマイルームで、部屋の持ち主であるアリンが顔色を暗くして室内のイスに座っていた。

手には、以前とある存在と別れた場所に咲いていた紅い薔薇が持たれていた。

この薔薇は普通の薔薇ではなく、フォトン栄養素として育てられた特殊な薔薇だ。

そのため与えるのは、水では無くフォトン要素。

その薔薇を見て、アリンはとある存在の事を思い出していた。

実験体として逃げ、目の前で処理されてしまった可哀想な1人の存在の事を。

アリンはその事を考えるたび、目に涙を浮かべていた。

「アリン、入るぜ。」

アリンが顔を暗くしていると、マイルームの扉が開くのと同時に声がした。
名前を呼ばれ顔を上げると、そこにはギラムが立っていた。

「ギラムさん・・・」

「やっぱりな。あのナヴァルの事を考えてたな。」

ギラムはそう言いつつ、アリンの座っているイス周辺の別のイスに座った。

「・・・あの子への対応、本当にコレで良かったのでしょうか・・・」

「ああ。本人もそれを望んでいたからな。」

アリンからの問いかけにギラムはそう答え、手にする薔薇を見た。

薔薇は不思議な光を放っており、普通に目にする薔薇とは違う輝きを見せていた。

「自分をもっとも大切だと思った存在、自分が秘密で守っていた薔薇の園。 そんな大切な存在だからこそ、その花園の花を見せたかったんだろ。」

「ええ……」

「今はその花園は、俺達しか知られない場所に静かに咲いている。 託された俺達だ、今後もあの花園を見守って行ってやろうぜ。 アイツのためにもな。」

ギラムは励ますように、アリンに言った。

「・・わかりました。 きっと、あの子もそれを望んでいたのですよね。」

「ああ、きつとな。」

アリンも話を聞いて納得したのか、その場を立ち上がり、フォトンドロップの入った綺麗な花瓶に薔薇を入れた。

一本だけでも、綺麗に咲く薔薇。

その薔薇を見るだけで、2人はあの存在が、常にそばにいる気がした。

「アリンさん！ 大変です！」

「主！！ やばい奴が来た！！」

そんな穏やかな雰囲気乱すかのように、2体のマシンリーが部屋に飛び込んできた。

「フィル、どうした？」

「ベルちゃん、どうかしたんですか？」

2体のメカ龍の慌てっぷりを見て、2人は不思議そうに見た。

そして、

「異世界人が来た！！」

「異世界人が来ました！！」

2体は1回息を整え、ほぼ同時に言った。

「異世界人？」

こちらもほぼ同時に、質問を聞きなおすように言った。
すると、

「あ、見つけた～☆」

「ヘイユー達！ エスケープとはどう言う事だい？」

フィルスターとウィンドベルの後方から、1人の1体の声がした。

「出、出たああ————！！」

「ッ～・・・」

その場に立つ2人を見て、フィルはもうダッシュでギラムの背中に隠れた。
ベルはと言うと、その場に気絶し倒れてしまった。

「べ、ベルちゃん！？」

「メ・・・メイド？」

アリンは慌ててベルを抱え上げ、ベツトルームへと運んでいった。
ギラムはと言うと、その場に立つ女性を見て啞然としていた。

そう、そこに立っていたのは。

1人のメイドと、1体の白龍だったのだ。

「クラウチ・・・ 一体コレはどういう意味だ？」

アリンの部屋での一騒動をひとまず終え、ギラムはアリンと共にクラウチの元へ。
もちろんギラムの右肩にはフィルスターが、アリンの両腕の中にはウィンドベルが。
そしてその後方には、先ほどのメイドと白龍が目を丸くして立っていた。
ちなみにその後の一騒動とは、簡単に言うと自己紹介だ。

「まあそう怒るなって。 お前らにも悪く無い話だぜ？」

「だからって、勝手に決めるな。 俺らが困るだろ。 『メアんで一す』って、明るく自己紹介されたぞ。」

ギラムは態度を変えず、クラウチを対面していた。

「クラウチさん。 彼女と彼はいったい・・・」

そんなギラムをよそに、アリンは少々困りつつクラウチに問いかけた。

「ああ。 アレは簡単に言うと、メイドだ。」

「そんなの見りゃ解る。」

クラウチは相変わらず苦笑したまま、そう言った。
もちろん、そんな答えで納得するギラムではない。

「そうだそうだー」

フィルスターも同じく賛同した。

「家庭の事情で金を集めてるらしくってな、いい金儲けがメイドという考えに行き着いたらしい。
ココに来た理由は、小遣い稼ぎだ。」

「はあ！？」

クラウチの答えを聞き、ギラムとフィルスター、ほぼ同時にそう言った。

「傭兵の方がよっぽど金稼げるだろ!？」

今まで得た情報で、メイドより傭兵の方がよっぽど稼げる事を知っていたのか、フィルスターはそう言った。

「第一なんでメイドが、小遣い目当てでリトルウィングに所属の傭兵になったんだ？」

驚くフィルスターを置き、ギラムは冷静に答えを聞いた。

「そのままだ。メイド修行には金が必須、金稼ぎが楽なのは傭兵って事らしい。」

「だったら傭兵になれよ・・・」

クラウチからの答えを聞き、ギラムは呆れつつ、後方にいるメアンと名乗るメイドを見た。メアンは楽しそうに白龍メカと話をしており、意気投合しているのは目に見えた。

「クラウチさん。彼女が私達の所へ来た理由は、何ですか？」

ギラムにはもう追求するネタが途絶えた事を悟り、アリンは続いて質問した。

「ああ。丁度よさそうなパーティがそこでな。俺があんなのを相手にしてたら疲れちゃうからな。」

「厄介払いみたいな良い方だな・・・」

クラウチの答えを聞き、ギラムは再び呆れた様に言った。

「ま、腕はあるのは保障するぜ。メイドより傭兵の方がよっぽど向いてるくらいにな。」

「そうなのか？」

フィルスターはクラウチが言った事を聞き、そう言いつつ2人を見た。

すると、2人はその視線に気が付き、こちらへとやってきた。

「じゃ、改めてこいつらに自己紹介しろ。」

「は～い。」

クラウチにそう言われ、メイドはギラム達の方へと向き直った。

「改めて自己紹介するね。 アタシはメアン・スムロ。 メイドになりたくてココに来ました～☆ で、アタシの相棒のベリリー」

「マイネームはラズベリーだ。 ナイストゥミーチュー」

2人は相変わらずのテンションを忘れずに、ギラム達に自己紹介した。

「・・・」

その自己紹介を聞き、4人はその場に立ち尽くすしかなかった。

「じゃ、よろしく頼むぜ。 新参パーティ『ジュライ☆エターナル』」

クラウチにそう言われ、6人は支社を後にした。

希望が無い

「で、お前らはそう言われて俺らの所へ来た訳か・・・」

クラウチとのやり取りを一通り終え、支社を後にした一行。
その後6人は、その足でカフェへとやってきた。

「そう～ で、2人のパートナーマシナリーの龍を見つけて、追いかけてきたの☆」
「そ、そうか・・・」

陽気に話すメイドを見て、ギラムは少々相手するのに困っていた。
ここまで陽気に話す相手は、エミリアぐらいなものだからかもしれない。
そう、ギラムにとって一番対応が苦手なタイプだ。

「で、フィル達は急に追いかけて、俺らの所に逃げてきたって訳か。」

メアンにそう言われ、ギラムはそれぞれの主の膝に座るフィルスター達に問いかけた。

「そうだ。」
「はい・・・ すみません。」

質問に対して、2人はそう答えた。
堂々とするフィルスターと誤るウィンドベル。 態度が対照的である。

「急に追いかけられたもので、会話の余地も無く・・・」
「目当てが何なのか、全然解らなかったからな。」
「だろうな。」

2人からの説明を聞き、どうしてあの様な騒動になったのかを、ギラムは納得した。

「ま、そんなわけさ。 ミー達はユ一達の持つパーティにセットされたって訳。」
「クラウチさんからも話は聞いたよ～ 有能な新参パーティなんだって？」
「ゆ、有能かは、解りませんが・・・」

メアンにそう言われ、アリンはしどろもどろにそう言った。

「とりあえず腕はあるって言ってたな。 入隊試験はココは無いから、実力は定かじゃねえけど。 どうやってクラウチはあるって確信したんだ？」

ふとクラウチが言っていた事を思い出し、ギラムはメアンに問いかけた。

「えっと～・・・ ベリリー、何て言ってたっけ？」

問いかけられた事に対して答えようとし、メアンはラスベリーに聞いた。

「所持武器からストレンジなオーラが見えたらしいぜ。」

「オーラ??」

再び訳がわからない事を言われ、ギラムは再び首を傾げた。

「・・・ ま、クラウチがそう言うんだから事実か・・・」

「そ、そうですね・・・」

ギラムは追求するのに対して疲れたのか、聞くのを止めた。

アリンも口をそろえて、そう言うしかなかった。

『それにしても・・・ 随分とテンションが真逆な奴らが来ちまったな・・・』

目の前に座るメアン達を見つつ、ギラムはそう思った。

アリンと打って変わってテンション丸出しのメアン。

フィルスターやウィンドベルと違って積極的なラスベリー

明るいのが目に見える2人を相手にし、疲れた自分。

もはや言う言葉が見当たらない状態とも言えた。

『・・・だが、今のアリンの状態を考えると、ムードメーカーも必要か・・・』

ふと、ギラムは隣のソファに座るアリンを見た。

先ほどの部屋でのやり取りの時の彼女と今の彼女を比べると、顔色も明るくなり、少し笑顔になっていた。

相手にしてもそこまで苦は無く、笑顔のきっかけには良いと思われた。

「ま、クラウチがそう言ったんだ。 否定も出来ないな。」

『えっ！？』

ギラムは考えた結論がまとまり、メアン達を見つつそう言った。

「今後とも、よろしく頼むぜ。 メアン、ラスベリー」

「そうですね。 よろしくお願ひします、メアンさん。 ラスベリーさん。」

ギラムの言った事を聞き、アリンも口をそろえて言った。

「本当～☆ よかったね、ベリリー」

「ラッキーだなマスター」

2人は両者の言葉を聞き、嬉しそうに言った。

6人に笑顔が戻った・・・と思われた。

「ちょ、主！！」

だが1人、否定派がいた。

「なんだフィル。 どうした？」

否定派とはもちろん、フィルスターだ。

「こ、こいつらと今後の任務を共にするのか！？」

ギラムの着ている服を軽く引っ張りつつ、フィルスターは答えを求めた。

気のせいか、涙目になっている様子だった。

「クラウチの命令だしな。それに4人だけじゃ、任務が辛い時もあるだろ。人数調整も丁度良い。」

「だからって！！」

自分の考えと同意して欲しいのを丸出しに、フィルスターは言った。
もちろんそれで答えを変えるギラムではない。

「え～ 駄目～？」

そのやり取りを聞き、メアンが残念そうな声を上げた。

「ユーはミー達が嫌いか？」

「なっ・・・」

メアンとラスベリーにそう言われ、フィルスターは答えに困った。
内心は否定だが、賛同の5人に対して自分が勝ち目が無いのを知っており、答えに困っていた。

「フィル、素直に首振っとけ。勝ち目は無いぞ。」

「私は、どちらでも構いませんよ。」

「僕もですよ、フィル。」

「お、お前ら・・・」

ギラムから楽な道を進めれ、アリンとウィンドベルの答えをフィルスターは聞いた。
そして悟った。

『勝ち目、ねえ・・・』

完全に劣勢である事を。

「・・・解った。」

「よかった～☆」

フィルスターの答えを聞き、再びメアンは表情を明るくした。

先ほどの時とあまり変わってはいないものの、まあそこは突っ込まないでおこう。

『・・・クソッ どうしたらいいんだっ・・・』

言ってしまった答えを後悔しつつ、フィルスターは頭を悩ませていた。

苦な理由はもちろん、フィルスターにとって一番苦手なタイプだからだ。

ギラムと似たような理由だが、こちらの方はプラス思考率は低い様子だった。

その後チーム内での面接を終え、カフェを後にしたギラム達。

入社時のエミリアの時同様、彼等はこれからメアンのために用意された自室へと向かっていた。すでに彼女には配属されたマシナリーが居る事もあり、荷物整理等々は当に済んでおり、簡単に部屋へ招待するという流れだ。

ちなみに言い出したのは、部屋主であるメアン本人だ。

「・・・そういやお前。」

「メアンで良いよー」

「ああ、悪い。メアン、メイド修行って言ってたが・・・どんな事をするんだ？」

住居区へと繋がる廊下を歩きながら、彼は素朴に思っていた事を彼女に問いかけた。

元々彼の中には『メイド』という単語は無いに等しく、見た目は解るが大まかにどんな仕事をするのかを知らない。

その上奇想天外すぎる程に濃いキャラが出てきた事もあり、仕事内容がいささか気になるのだろう。

「んーっと～ 基本はご主人様である旦那様ーや奥様ーの、日々の多忙なスケジュールの合間の住居に対する仕事を賄うのが、アタシ達メイドー」

「元々は『使用人』と呼ばれています。男性の方でしたら『執事』女性の方でしたら『メイド』と言う、新しい呼び方で呼ばれることが最近は多いんですよ。」

そんな彼からの問いかけに対し、メアンはいつも通りの調子で彼に説明をした。

説明に対する補足をアリンは付けたし、より分かりやすく理解出来る単語に置き換え再度説明した。

2人の話を聞き、ギラムは軽く頷き解釈を改めていた。

「ギラムさんの普段の暮らしを考えると、フィルがメアンさんの役目をおってる感じです。」

「フィルと似たような仕事をするのか・・・」

最終的な結論をウィンドベルが言うと、彼は納得したように言葉を漏らしつつ、肩に乗っていたフィルスターを見た。

だが、

「はあああ——・・・」

しかし今の彼は、そんな和やかなムードに馴染める体調では無かった様だ。

和解し新たに入ったメンバーを出迎えるのがベテランであり、なおかつサポートをするフィルスターには大事な仕事だ。

それがおろそかになる理由と言え、カフェでのやり取りしかない。

マシナリーにあるまじき溜息ばかり付いている。

『・・・さっきから溜息ばっかだな。そんなに嫌だったのか・・・？』

そんな彼の調子を見て、ギラムは横目で見ながらナーバスな彼をそっとしておいてあげる事にしたようだ。

軽く頭を撫でるも嬉しそうにしない彼を見て、無理にフォローを入れても逆効果になると察したのでろう。

心の中で軽く詫びつつも、彼は再び視線を前に戻した。

「ついたー はい、ココがアタシの自室兼修行の場所だよ～」

しばらくすると、彼女の自室がある一室の前へと到着した。

外見は何処も同じではあるものの、表札からわかるほどに何処となく違う雰囲気醸し出している。

一般の傭兵達の表札は『看板』に近い物を使っており、人によっては壁際にネームを入れる形を採用している。

女性の傭兵はそれとは少し違い、可愛らしい物を使っていたり無難な物を使っている事が多い。が、彼女はどれにも値していなかった。

「・・・」 『ネオン・・・？』

彼女の扉の前に掛かっている表札、それは電気街で使われていそうな『ネオンボード』だったのだ。

常にフォトンを使っているのか煌びやかに発行しており、何処となく周囲が明るい。室内灯とは違った色合いが、辺りを明るい雰囲気へと変えていた。

「ささ、入って入ってー お2人様ーごあんなーい！」

その後部屋のロックが解除され、おもてなしをするかのようにメアンは2人を部屋へと招き入れた。

声に軽く戸惑いつつも、ギラム達は彼女の部屋へと入った。

「うわっ・・・」

「まあ・・・ 素敵な部屋ですね！」

室内は外のネオンボードに負けじと、どこもかしこも電光掲示板を使ったかのような壁を使っていた。

所々に設置されているルームスタンドには異国雰囲気を醸し出す造りをしており、ライトの外には鉄格子と思われる装飾が施されていた。

『黒』を基調としたその部屋は、客人を招くと言うよりは『ゲーム』をする場所と言った方が近いかもしれない。

それだけ、客人と話をする場所としては似つかわしくない部屋である。

とはいえ置かれている家具は日用品であり、ガラス張りのオシャレなテーブルに椅子が置かれていた。

こちらも英国風とは程遠い物ではあるが、彼女の正確にマッチするセンスであった。

所々に置かれている観葉植物は、そんなセンスの中修行する場としての意識を示しているかのようにも見えた。

「・・・なんか、凄い部屋だな・・・」

「本当～？ アタシ、地味だった物ってあんまり好きじゃないからかなーこういう賑やかなのが好きなんだよね～ 楽しいのが一番！って感じー」

『見たまんまじゃねえか・・・』

軽く部屋の雰囲気には圧倒されつつも、ギラムはとりあえずと感想を一言述べた。

それに対し彼女は嬉しそうに話だし、部屋の雰囲気は趣味のみで構成されている事を自慢げに話していた。

とはいえ、見たままであり丸出しの趣味に対する突っ込みは飛んでこないはずがない。

それを一番強く思っているのか、フィルスターは心の中で呆れながらも唸っていた。

優美さが無い

突如上司から強制的に入隊する報告を受けたギラム達は、メアンのマイルームへと通されテーブルと椅子の置かれた場所へと案内された。

そこにはすでにセッティングが整ったテーブルがあり、ナプキンとフォーク等の食器達が綺麗に並んでいた。

使う物全てが綺麗に磨かれており、おもてなしの準備が完璧に整えられている事が分かる光景であった。

そんなテーブルに足りない分の椅子が置かれると、メアンとラスベリーはギラム達に座れるよう行動していた。

「ではご主人様方、今夜のディナーはこのメアンがご用意致します。少々お待ちくださいませ。」

4人を椅子に座らせると、メアンは丁寧な言葉使いで彼等に挨拶をし奥に特別に用意したキッチンへと向かって行った。

残されたギラム達は軽く啞然としつつも、言われた通りその場に座りやってくる料理を待つこととなった。

「・・・どーしてこうなったかな。食事のもてなしを受けるとは、聞いていたが。」

「でも、少し懐かしい感じがします。メアンさんも、一生懸命なんですよ。きっと。」

「それもそうか。」

なんとなくぼやきながら彼は一言口にする、アリンは少し楽しそうに感想を述べた。

その時間を彼女はそれなりに満喫している様子で、懐かしい感覚がすると良い笑顔を見せていた。

ナヴァルと居た時の笑顔であり、それを見たギラムは少し嬉しそうに相槌を打つのであった。

とはいえ、

「飯とか食える気分じゃねえ・・・」

隣に居る隣人は、そんな笑顔すら気にしない様子であった。

パートナーマシナリー用の椅子に座るフィルスターにも食器の準備はされており、彼ら用の物も用意される雰囲気は漂っている。

が、そんな事では彼の気分は晴れない。

「フィル、いい加減気分を入れ替えろよ。 どの道ココでは入隊を阻害する手立てなんてないし、お前が情報工作した所でメアンが俺達のパーティに入った事実を変えるのは無理だぞ。」

「むー・・・」

「大体フィル、お前何がそんなに気に食わないんだ？ アリンの時は一切否定なんかしないで、むしろこんなチームの結成を提案したくらいじゃないか。」

「そうですよ、フィル。 ラスベリーさん達の事、嫌いですか？」

そんな彼を見て、ギラムは仕方なく彼の苦悩する根本的な部分が何なのかを知ろうと質問した。それに対し彼は回答を渋るも、ウィンドベルの質問もあり皆が心配してくれてる事を知り、表情を曇らせつつもゆっくり顔を上げた。

自分と共に居てくれる仲間が心配をしてくれる事はフィルスターからしたら初めての事であり、何より自分の主人が呆れている事も彼は解っていた。

それでは配属された身の彼からしたら苦痛であり、主人がこのままでは気分よく仕事をする事に支障が出てしまうかもしれない。

そう思い結審した様子で、フィルスターは言葉を口にした。

「・・・悪い。 俺は」

「へーイッ！ ユー達、まずはウォーターをプールさせてもらうからなっ！」

「・・・ ナンデモナイデス、ゴメンナサイ。」

『アァー・・・』

が、呆気なくその言葉は打ち消されてしまった。

何かを言おうとしたフィルスターではあるが、珍しく機械的な発言をした後大人しく椅子に着席し一切口を開こうとしなかった。

それを見たギラム達は心の中で溜息をつきつつ、今のフィルスターの内心を思いそれ以上は言わないようにしようと心に決めるのであった。

そんな4人を尻目に、ラスベリーは慣れた手つきでアリンの前に置かれたグラスに水を注いでいくのであった。

理由を聞きそびれてしまったギラムは、仕方なく彼を部屋へと帰す事にし小声で部屋で適当な雑務をこなしてくるよう指示した。

それを聞いたフィルスターは一瞬驚いた表情をし、本当に良いのかと主人に質問を返した。

彼の心中を思い軽く頭を撫でながらギラムは再度言うと、フィルスターは思いっきり涙目になりつつも一生懸命に首を振り、そのまま部屋を後にして行くのであった。

そんな彼を見て、アリン達は苦笑しつつメアンの登場を待っていた。

フィルスターが部屋を後にしたのを見送ると、ギラムは静かに着席し注がれる水を見ていた。

水が注ぎ終わられると、ラスベリーはウォーターポットを持ったまま静かにギラム達に言った。

「ユー達。 1つだけ、ミーから事前にソーリーと言いたい。」

「えっ？」

不意な事だったため彼等は驚きながらラスベリーを見ると、彼は正直嬉しい報告ではない事を断りつつポットを持ち直し、こう言った。

「どうか、腹をポイズンにしないで欲しい。 後で口直しをスポンサーするから。」

「・・・」

その言葉を聞いた皆は、どんな料理が提供されるのだろうか。

一瞬解らなくなる発言を聞き、皆の思考が一時的に停止しそうになった、その直後。

「おっまたせしました～♪」

「・・・ ！？」

ラスベリーの後にやって来たメアンによって運ばれてきたワゴンに乗っていた料理を見て、ギラム達は表情を変え絶句した。

彼女の運んできた料理は、前菜を初めとしたフルコースの料理には変わりはない。

しかし、料理の色が料理とは思えない妙な色をしていたのだった。

前菜は青く、肉料理と思われるメインディッシュは赤く爛れていたのだから・・・

脅威しか無い

「皆お腹空いたでしょー？ アタシのおごりって言うか、研修に付き合わせちゃってるからじゃんじゃん食べちゃっていいからねー♪」

「・・・」

不意に食事会となったギラム達は、メアンの持ってきた料理を見て啞然としながら切り分けられる肉料理と思われる代物を見ていた。

前菜として持ってきたサラダは別の意味で『青々』とした『青色』のサラダであり、とても緑黄色野菜の色とは思えない色を放っていた。

その後テーブルに並べられるであろう肉料理は逆に『赤色』をしており、何をかけたのか肉の表面である皮が爛れていた。

普通ならば綺麗な色合いがマッチして美味しく見えるのが普通なのだが、これでは魔女の料理である。

このメイドは何者なのだろう・・・

と、その場にいた皆が思っているであろう言葉をあえて文章で書いてみる。

「・・・一応聞いておくが、メアン。今日のメニューは。」

「あ、まだ言ってなかったねー 今日のは『青野菜のシンプルサラダ』と『カリカリチキンにレッドペーストを添えて』だよー」

「そ、そうなのか・・・」

いたって料理名は普通なのが、また不思議に思える点であろう。

とはいえその料理をイメージさせる『色』そのものが現物に入る事は、基本無い。

何をどう調理したらその色が出てくるのか、とても奇妙だ。

「後失礼ついでに聞くが・・・ 食べるんだよな？ コレ。」

「えっ？ 何言ってるのギラムー コレね、普段アタシが作ってる料理でも上出来な分類なんだよー？ 失礼しちゃうなっ」

「それは、悪かった・・・ ..」

だが本人いわく『食える』らしい。

いわゆる見かけ騙しの分類に入るのかもしれないのだが、初見で何も言われずにいたのであれば『毒』としか思えない。

状態異常が任務以外で付いてはしゃれにならないであろう。

とはいえ雑談をしている間も彼女の手は休まる事無く切り分けられ、丁寧に盛り付けされた肉料理も彼等の前へと並んだ。

地味にギラムの分だけ肉が多いのは、彼女の配慮の様だ。

『いっぱい食べてねっ♪』とのことだが、とてもいい迷惑である。

その後迷っているアリン達を見て覚悟を決めたのか、ギラムは静かに合掌した後前菜を取り口に運んだ。

口の中に広がるであろう未知の味に耐えようと心構えしていた、その直後に出た感想は

「・・・ あれ、普通に食える。」

いたって普通であった。

とても吐き気のする色合いをしているのに対し、野菜はとてもシンプルな物であった。

どうやらかかっているドレッシングは彼女が手がけた物では無く、相方のラズベリーお手製だそう。

これぞ『見かけ騙し』であろう。

「だから言ったじゃーんっ ギラムのアホウっ」

「はいはい。・・・」 『調子狂うな・・・』

そんな彼の毒見も済み、アリンは心なしか苦笑しながらサラダを口に運んでいた。

食材の色合いとしてタブーに入る『青色』が美味しいとなると、隣の肉料理はどんな味がするのだろうか。

軽く別の興味本位が沸いた様子で、ギラムは手にしていたフォークを別の物に変えて口に運んだ。

しかし

「・・・！！ マァアアツズッ！！！！ ゲッホゲホッ！！！」

こちらは一筋縄ではいかない味わいであった。

最初のは罨だったかのような味付けであり、こちらの料理は味覚を崩壊させるほどの劇的な代物。

どんな味かは、ご想像にお任せします。

「ギ、ギラムさん！？」

「ミスター！！ アーユーオーケー！？」

そんな彼の感想とむせ具合を見て、アリン達は慌てて彼の元に水を運んだ。

彼女達のグラスを片っ端から彼は手にし口に入れ、食物だが食物ではない代物をさっさと胃の中へと運んでしまった。

むしろ出した方が良かった気もするが、その辺はパニックに至った彼の思考回路で唯一正常に働いていた所かもしれない。

いわゆる『一旦入れたら食べましょう』という流れだ。

「あれえー？ おっかしいなー、ちゃんと分量図ったのに・・・」

「感想はそこかああっ！！！」

「ギラムさん、気確かに・・・！」

とはいえ、身体が丈夫な種族は伊達に腹は下さない様だ。

彼女の場違いな感想に激怒しつつ手にしていたグラスを置き、軽く怒る始末である。

無理もない、下手したら住む世界が変わる味付けであったのだから。

「マズイー？」

「マズイ。」

「むうー・・・ じゃあ今度は、美味しく作るね♪ 今回ののは残しても良いから、無理しないでねー」

「あ、おいっ！」

完全に本心である感想を2品の料理に言うと、メアンは軽く落ち込んだと思った途端。何を思ったのかそう言い笑顔で謝罪と思われる言葉を口にした後、裏へと戻って行ってしまった。

後始末は、今はしないらしい。

「・・・何なんだ一体・・・」

「ギラムさん、大丈夫ですか・・・？」

そんなメイドに呆れていると、ギラムのそばへとやって来たアリンは身体を気遣った言葉をかけた。

彼女の心配そうな顔を見た彼はいつも通りの笑顔を見せ、平気だと良い再び水を飲んでいた。

「これくらいなら何とかな。大丈夫さ、昔から野草ばっか食ってたから腹は丈夫だ。」

「無理はなさらないで下さいね。・・・私も、あまり味付けは好みでは無かったです。」

「使われている物は全て自然物でしたが、化学反応が測定出来ないほどに起きているみたいですよ。」

「ユー達は優しいな。」

そんな3人のやり取りを見て、ラズベリーはギラム達に感想を述べた。

彼の言葉を聞いた3人は少し驚きながら彼を見ると、1人残された食材を処分しつつ口を動かしていた。

「素直に言うと、マスターはメイドに向いていない。調理は愚か、掃除も後片付けも本人は丁寧と言うが・・・これではなかなか。」

「ラズベリーさん・・・」

向いていない仕事を何故やろうとしているのかは解らないが、それでも彼女は続け上達する事を願っていた。

だが現に彼女の『嗜み』は一般常識とは外れた行いばかりであり、料理のセンスは度を越えた低ランクだ。

相方の腕前はプロであっても、これでは上達の道筋は見えはしない。

「ユーが初めてだ、マスターの料理を旨いと言ったのは。　ありがとう、嘘ではない言葉はハッピーに値する。」

「えっ、そうなのか？」

しかし今日の食事会では嬉しい感想を貰えたこともあり、相方にとっても良い時間だったと言っていた。

感想を述べられたギラムにとっても解ってはいたが意外な返答であり、そう言ってくれる相手にも今まで出会えなかったそう。

ゆえに彼女は落ち込む事はとうに捨て、常に前を見て進んでいる。

彼からの話を聞いて、3人は困惑しながらも彼の片づける料理の光景を見ていた。

すると、

「ラズベリー、だったか。」

「イエス。　なんだねミスター？」

不意にギラムは彼の作業を止める様に名前を呼び、テーブルに近づきながら片づけようとしていた前菜のボールを軽く手にした。

それを見た彼は不思議そうに顔を上げ、彼を見た。

「前菜、持って帰っても良いか。　普通に美味かったし、まだ食えるならフィルにも食わせてやりたいからさ。」

「・・・分かった。　パックに詰めよう。」

「ありがとな。」

とても意外な感想を述べた、彼の最大の配慮だった。

落ち着きも無い

ウィーン……

「フィル、ただいま。」

「主いいー！！」

修行中メイドの魔界の晩餐会を終え戻ってきた彼は、その足で自室であるマイルームへと戻ってきた。

手にはラズベリーが詰替えてくれた前菜の入った真空パックが握られており、自室に居る相方への手土産となっていた。

扉のロックを開け部屋へと入るや否や、彼の元に緑色の動く物体が彼の身体にすがり付いてきた。

やって来た相手は、言わずともフィルスターだった。

「大丈夫だったか！？ 『胃薬、胃腸薬、うがい薬、風邪薬、解熱剤、漢方薬、ソルアトマイザー全部そろってるぞ！！』

彼の身体にすがり付いたと同時に手にしていた救急箱を開け、完璧に用意されたであろう治療薬の大半が揃っていた。

何処でそろえたのかすらわからない薬味の数々も丁寧にシャーレへと移されており、留守中に何をしていたのかと思われる行動っぷりである。

とはいえ、彼の身体を心配していた事には変わりはない様だ。

「おいおい、いかにも【毒】を食いにきてきたみたいじゃねえか…… 安心しろ、腹痛は起こしてねえから。」

「そ、そっか……ゴメン。」

「良いよ、心配かけてすまなかったな。 フィル。」

そんな彼の無駄な配慮に呆れつつも感謝し、ギラムはフィルスターの頭を軽く撫で落ち着かせた。

頭を撫でられた彼は照れつつも開けた救急箱を閉じ、彼の後に続いてテーブルへと向かって行った。

「・・・でも、主もよく無事だったな。調べてみたら、結構有名な味音痴みたいじゃん？ あのお転婆メイド。」

「そうなのか？」

主人が席へ着くと同時にフィルスターは話をしだし、メアンの経歴を調べた様子で主人に説明した。

留守中にしていた事はそのリサーチの様で、調べた項目をまとめた書類を彼に手渡した。渡された書類に目を通すと、受講した料理学校から配属された組織の名前まで丁寧に並べられていた。

ある意味凄腕のハッカー並みの仕事ぶりである。

「結構いろんな料理学校を梯子して修行してたらしいんだが・・・ コレを見てくれ。」

「？」

書類を見ている主人に補足で説明を入れ終わると、フィルスターは腕に内蔵されたシステムを弄り画像を何枚か映写した。

不意に映し出された画像を見ようとギラムは顔を上げると、そこには驚きの光景が撮影されていた。

出されたデータは料理学校での受講風景の様子で、彼女の料理方法を調べた結果で上がったものだった。

食材を切る際の包丁は『鎌』に近い物を使い、食材を洗う際に使うタワシは『金属製』を使っていた。

一般的な料理とは違う料理殺法を行い調理をしている事が、とても良く分かる写真の数々であった。

盛り付けの際はとても普通の為、問題は料理方法である事が判明した。

「鎌なんて何処から持ってくるんだ・・・ あのメイドは。」

「で、一番の問題がこれだな。」

「・・・！？ おい、コレ『ミラージュブラスト』じゃねえか！！ こんなので焼いたのか！？」

そして一番の問題に匹敵する画像を出すと、ギラムは驚愕の料理方法に驚きながら口論した。彼女の調理方法の『焼く』というのは、焼き加減である『ウェルダン』以上に匹敵する火力で全力投球をかます事の様だ。

ご丁寧にミラージュブラストを展開する所を見ると、ほぼ全幻獣を召喚してもおかしくないと思

われる。

「らしいぜ。」

「おいおい・・・ 攻撃用の幻獣を料理に使ってんじゃねえよ。 ユートがよく呼び出してたから、見覚えがあるぜ・・・ 確か『ヌイ』だったか。」

とはいえミラージュブラストを使わないギラムでも幻獣の名前を知っており、同僚でもある『ユート』がよく呼び出す幻獣だった。

他にも似たような画像があると良いフィルスターが出した画像には他の幻獣達による料理殺法の数々であった。

『ヌイ』で焼き上げ『コンル』で氷砕し、『カンナ』で焼印をして『トイトイ』でミンチにする様だ。

とても素晴らしい行いである。 呆れるくらいに。

「・・・これじゃあラスベリーもお手上げになるわけだ。・・・じゃあ、なんでコレは美味かったんだろうな。」

「？ 主、それは？」

「今日出された前菜のサラダだ。 フィルも食ってみな、旨いぞ。」

「主の申し出でも、それは断りまっす！！」

「一応言っておくがお前の分だからな・・・？ まあいいけどさ。」

とはいえ、問題なのが調理方法である事が分かった。

しかしギラムには気がかりな点が1つあり、その問題となるのが彼が持ち帰って来たサラダだ。 コレは少なくとも水洗いをする事が含まれており、先ほどの洗い方を見た限りでは何かしらの道具を使っているかもしれないと思ったのだ。

だが味はいたって美味しく、ドレッシングととてもマッチした素晴らしい前菜に該当する。

「コレは美味かったから、持って帰って来たのか？」

「料理って言うのは、なんでもタダで出来るもんじゃないからな。 食材を手に入れる事すらも難しい人間だっているし、俺みたいに買い食いが一生出来ない暮らしを送ってる奴もいるかもしれない。・・・そんな人と比べたら、捨てるなんてありえないだろ？」

「まあ・・・それもそうか。・・・主は優しいな。」

「よく言われるぜ。」

先ほどからギラムが持っていた事もあり、フィルスターは先ほどから気になっていた様子で彼に問いかけた。

中身があのメイドお手製の料理と聞き嫌そうな顔をするも、主人が『美味しい』と言ったと同時に表情が一変した。

彼は彼なりに考えがあってその行動を取り、どんなに料理が下手な人でも美味しい物がこうしてできる。

貧困生活を送っている存在も居る事を彼は知っている様子で考えを述べた後、ギラムは備え付けられていたフォークを手にし前菜を口にしていた。

3種類の野菜に柑橘系の爽やかな香りのするドレッシングが青野菜と絡み、彼の口の中に優しい美味しさを届けていた。

生ではとても食べられない野菜ばかりなのに対し、その素材の苦みを感じさせない味わい。とても美味な様子で、ギラムは美味しそうに食べていた。

「・・・主ー 俺も食っていいか。」

「何だ、さっきと言ってる事が違うじゃねえか。・・・ほらよ。」

「あーん。」

パクッ

「・・・あっ、マジうめー あのメイド、メイン作らなきゃ絶対料理面はカバー出来るだろ。」

「サブだけの仕事じゃ、多分メアンは満足しないと思うぜ。・・・」

そんな彼の食べる姿を見て美味しそうに思ったのか、フィルスターは遠慮がちにギラムに一口欲しいと言った。

先ほどと言っている事が逆な事に苦笑しながらギラムは適量をフォークで付き刺し、フィルスターの口元へと運んだ。

彼の口の中にもギラムと同じ味わいが伝わり、電子回路がそれを解析し『美味しい』という回答を導いていた。

前菜だけであれば仕事に就けるとフィルスターは太鼓判を押すも、それでは満足しないだろうとギラムは言うのであった。

『もしかしたら、他に向いている仕事があるかもしれないな。料理じゃ、当分金は入らない。

』

フィルスターが美味しそうに食べている様子を見ながら、ギラムは彼女に向いている仕事は無いのだろうか考えるのだった。

異例でしか無い

恐怖の晩餐会になりかねない度肝を抜く夕食会が終わり、次の日の事。
朝食を取り終えたギラムは身支度を済ませた後、メアンのマイルームへと向かっていた。

コンコンッ

【・・・？　 hey、ウェーアーユー？】

彼女のマイルーム前へと到着すると、彼は静かに扉をノックした。
すると中からラスベリーの声が聞こえ、誰なのかを聞いてきた。

「ああ、俺だラスベリー　ギラムだ。」

【ギラムか。　ウェルカームッ】

問いかけに対しギラムはそう答えると、中に居たラスベリーは扉のロックを解除し中へと招き入れた。

扉が開くと、そこには小さ目の割烹着に身を包んだ彼女のパートナーマシナリーの姿があった。
ご丁寧に頭には三角巾が付けられており、どうやらお仕事の最中だったようだ。
手には小さ目のハタキも持たれており、部屋の掃除をしていた様だ。

「朝早くにすまないな。　ちょっとメアンに話があるんだが、彼女は居るか？」

「マスターなら買い出しに出ている。　・・・まだ帰宅には時間を要するが、良ければティーブレイクでもどうだい？」

そんな彼にギラムは要件を告げ、メアンは居るかと彼に問いかけた。
しかし生憎彼女は現在不在中であり、修行用の食材を調達しに行っているとのことだ。
何処に行ったかは聞かなかったが、恐らく同コロニー内にある食品街であろう。

用のある相手が不在と言う事もあり、帰宅するまでの時間があるためラスベリーはお茶でもどうかと彼に提案した。

そんな彼の提案を聞き、ギラムは軽く頷いた。

「ああ。 じゃあコーヒーを頼めるか。」

「お安い御用さっ」

提案を受理すると、ギラムはラスベリーに招かれ部屋へと入室して行った。

部屋へと入ると、ギラムは昨日も座ったテーブル席へと案内され適当な場所へと座った。

その際奥へと入って行ったラスベリーが割烹着姿から蝶ネクタイを身に着けた状態で現れ、手には茶器一式と茶菓子の入ったガラス製の器がトレイと共にやって来た。

どうやら接客時と内職仕事の際の身だしなみは違う様子で、わざわざ着替えに行きつつも必要な物を持って帰ってくるという作業は、キャストらしいスピーディな対応だ。

その上彼はその場に努める傭兵達の補助を行う存在なのだから、ワンランク上の対応が常識なのだろう。

目の前に用意されていくコーヒーを見つつ、ギラムはそんな事を考えていたのだった。

「ところでミスター 前もって聞ける要件なら、ミーが聞こうか。」

そんな事を考えていると、用意されたコーヒーを彼の前に置きつつラスベリーは要件を聞いてきた。

事前に何を聞かれるのかを把握しておくのも彼等の仕事の様子で、とても彼女と居る時のハイテンション振りが嘘であるかのような対応である。

ある意味では、フィルスターとラスベリーはよく似ている。

「ああ。 . . . っても突拍もない提案かもしれないけどさ。 メアンを他の惑星での仕事に連れて行こうと思うんだが、どうだ？」

「それは、この軍事会社の『傭兵』としてのウォークか？」

「その通りだ。 確かクラウチが武器がどうこうって言ってたから、そっちの素質もあるんだろうなって思ってさ。 もちろん俺も同行するし、何ならラスベリーも一緒に良いぜ。」

そんな彼の質問に対しギラムは唐突である事を詫びつつ、昨晚考えた事を彼に話した。

メイドとなる事を目標としている彼女にはそのスキルは皆無ではあるが、それ以外に長所を発揮

出来るところが何処かにあるのではないか。

それをギラムは考えており、半ば無理やりではあるが配属された自分達のパーティなのだから、少しでも反対しているフィルスターの考えを変えてやりたい。

そして、新たにやって来たメアンに無理にではなく『自然体の笑顔』を出させてやりたい、と思っていたのだ。

一通りの考えをギラムは伝えると、ラスベリーは少し意外そうに話を聞いた後、軽く腕組みをし何やら考えていた。

彼の結論が出るまでは静かにしていようと思い、ギラムは用意されたコーヒーを飲んでいた。

「・・・やはり、ユーは他の連中とは違うな。 そのような提案を受けたのは、ユーが初めてだ。」

「そうなのか？」

それからラスベリーからの返答があったのは、しばしコーヒーを飲んだ後だった。

何やら意外そうな提案だったため軽く驚いている様子で、素振りはないものの軽く嬉しい申し出だったようだ。

誰かからの誘いを受ける事自体が珍しいのかと思ったギラムだが、どうやらそう言う意味では無い様だ。

「マスターの性格上、他の者達がアポを取ってくる事は稀ではない。 だがユーの様にマスターを考えての行動は、とても新鮮だ。 その上、マスターの性質を良く把握している。」

「性質？」

「マスターはクッキングやクリーンよりも、ユーの様な仕事の方が向いているんだ。 ココのマネージャーが武器の事を見破ったのもだが、ユーは良く覚えていたな。」

友達となるであろう友人からの誘いは、どれも言い出した相手が一番であり相手の事を考えた物ではなかった。

ゆえにギラムの言った提案にラスベリーは驚いている事を説明した後、主人であるメアンの事を良く分かっていると褒めていた。

メイドのスキルは一般とは違い、傭兵の方が断然向いている事は彼も解っていたのだ。

だが彼は配属された身であり、例え何かを言っても彼女はあまり聞く耳を持たなかったそうだ。 それだけ相手を考えてくれる相手の言葉でなければ、彼女の行動は変わりはない。 そう思っていたのだ。

「じゃあ、腕はお墨付きだったのか。」

「無邪気なマスターのウォークには、ミーもしばしば驚かされる。　　ミスターからの提案、ミーからもマスターへ話を付けようじゃないか。」

「ああ、ありがとなラスベリー」

その後彼からの協力も貰える事となり、ギラムの提案は受理されたのであった。

「とりあえず、近い時期にパルムの『旧ローゼノム・シティ』への依頼に行こうと思っていた所だ。　俺とフィル、メアンとラスベリーの4人で行こうぜ。　アリンには、俺から理由を話しておくからさ。」

「解った。　当日を楽しみにしているからな、ミスター」

「ああ、よろしくな。」

用意されたコーヒーを飲み終わると、ギラムは席を離れラスベリーと握手を交わした。互いの相方の仲が良くなるよう、祈りながら。

お約束でしか無い

ラスベリーとの間で交わされた依頼の話を即実行に移そうと、ギラムは部屋を後にした直後にクラウチの元へと出向いていた。

幸いその日は彼のデスク周りに居るのはチェルシーだけと言う静かな時間であり、彼は早速と言わんばかりに依頼のチェックへと移った。

彼が考えているのは惑星パルム内にある『旧ローゼノム・シティ』と呼ばれる地区であり、廃棄された街とも思われる人気の少ない場所だ。

ゆえに原生生物が住処にしているとも言える場所であり、時々駆除の依頼が舞い込む事がある。

直感的にそこにしようと思ったギラムであったが、実際の所何故そう思ったのかは彼自身も良く分かっていなかった。

「おっ、あったあった。クラウチ、この依頼を頼めるか。」

「おう。・・・って、ローゼノムか？ また珍しい所を選ぶんだな、お前さん。」

とはいえ、偶然に偶然は重なる様子で目的地が一致する依頼が舞い込んでいた。

ギラムはその依頼を選び上司のクラウチに告げると、上司からもまた意外そうなお声を頂戴していた。

無理もない、彼の選ぶ所は基本安全性を選んだり、同行者のためにもと治安的にも悪くない所を選ぶ事が多いのだ。

今回は打って変わって真逆の場所なのだから、こんな声も貰うのだ。

「今回は腕試しって言うのも込みで、少し腕が鳴りそうな所にしようと思ってな。パーティは俺とフィル、それとメアンとラスベリーで頼めるか。」

「メアンって・・・あのメイドか！？ お前さんチャレンジャーだな・・・ 配属させた俺が言う事でもねえと思うが。」

「ごもつともだな。まあでも、実力をちょっと見てみたいって言う『興味本位』って事にしておいてくれ。アリンには俺から言っておくから、情報はそんなに回さなくて良いぜ。」

とはいえ、彼にも軽く考えがあってその場にしようとした経緯もあるため、理由を言えばそこそこ納得してくれる。

腕っぷしでは彼もベテラン層に入るか入らないかのレベルなため、クラウチもさほど心配はしていない。

だが、同行者で再度度肝を抜かれる事になった様だ。

クラウチ本人からしても、メアンの面倒は見きれない様子でエミリア並みに手が焼ける相手の様だ。

ギラムに半ば押し付けた経緯もそこにあり、なんだかんだで和んでいる様子の彼等に一体なのがあったのか。

上司からしても『興味本位』が沸くエピソードになりそうだ。

「お前さん、あの後なんかあったのか・・・？」

「え？ ああ、ディナーに招待されたくらいだが・・・ 何でだ？」

「そうか・・・脳に異常があって、お前さんがこんなへんぴな土地を選んだっていうわけか・・・
いつもの正常な思考回路は焼けきれて、パートナーと一緒に無理心中。 スー・・・ご愁傷様ギラム。 良い奴だった。」

「まだ死んでねえって。 第一、俺は俺自身分かるくらい正常だ。 種族上そういうのは強いって言うのも、クラウチは解ってたろ？」

空白の時間の中で何があったのかを知ると、クラウチは半ば冗談なのかマジなのか解らない事を急に推理し、喋り出した。

お酒が入っているのだろうか心配するギラムであったが、最後の締めを聞いて素面である事を悟るのであった。

上司に対してあるまじき発言だが、仲が良い事も事実なため周りは何も言わない。

元社長にも謁見が出来る事も、ギラムが有名な理由の1つだ。

「冗談だ。 じゃあ早々に行ってこい、もう時期エミリアがランチの話を持って来るだろうからな。」

「りょーかい。」

からかい半分で部下を弄り満足したのか、クラウチはそう言い毎度の指定である依頼書のコピーを彼の端末へと送った。

それをギラムは返事をしつつフィルスターの元にもデータを送り、船の準備をするよう手はずを整えつつ、その場を後にして行った。

「はい、やって来ましたー惑星パルムうっ！ 色が地味っ垂れてるけど、アタシはぜんぜん平気でーすっ メイド様は何時だって、笑顔で居るんでーす♪」

「今日はテンションが高いな、マスター」

その後出発の時間が早々にやってくるや否や、彼等は目的地である『旧ローゼノム・シティ』へとやって来た。

彼女の発言通り色気の薄い建物が多いその場だが、警備システムはそこそこ働いておりマシナリ一達が決まった仕事をしている様子を、ギラム達は船から見ていた。

降り立つや否やのメアンの台詞は、清楚なメイドとは思えないほどの無邪気振りであった。

「とりあえずここでの依頼なんだが。メアン、ウェポンは何を持ってきたんだ？」

とはいえ彼等がその場にやって来た目的は、そんな話をする観光目的ではない。

傭兵としての依頼をするのであれば、それ相応の武器を持って現地に赴くのが当然だ。

念のためやってくる前に『武器の準備をしてきてくれ』と言ったギラムだったが、再度確認で持ってきたかをチェックした。

ちなみに今日の彼の武器は、以前同様ツインダガーである。

「あっ、そうだったねー 武器武器一っと・・・ ジャーンッ！」

シャキンッ！

「・・・フライパン、か・・・ 一応は予想してたが、それで戦うんだな。」

「もちろん、メイドおなじみの武器なんだからねー？ で、お供の『おたま』ちゃんに、包丁の代わりに『鎌』だよーっ♪」

「全然カワリジャネエー(棒読)」

彼女が持ってきた武器、それはツインセイバーのジャンルに入る『フライパンセット』であった。

右手には料理用のフライパンが持たれており、彼女の言うように対となる道具が『おたま』だ。他にもいろいろと武器を持参してきてくれた様子だが、結局のところコンセプトがある様子で、それに類似性のある物のみ彼女は持ってきていた。

包丁の代わりにとなる鎌は『イルギル・テストメント』

食器の代わりとなるフォークは『デモニックフォーク』

忘れちゃいけない飲み物は『ティッポ・ナゾラ』

食後のデザートとも言える締めは『アイスソード・ラム』や『スウィート・デス』

とても武器とは思えない物ばかりではある物の、どれも強化済みな様子。

真面目なのかおちゃらけているのか、人によっては両極端にとられそうな武器チョイスである。

念を押して言うと、彼女はいたって真面目である。 チョイスがおかしいだけである。

「いろいろあるんだな。 . . . まあ、ハンターだし良いのか。」

「いや駄目だからな主!？」

とはいえ、誘い主には左程問題のない武器チョイスの様だった。

相方であるフィルスターが再度吠えるも、再び虚しくフォトンと共に馴染んで行った。

「打撃武器も射撃武器もあるんだ。 文句は無いさ。」

「さっすがミスターギラム。 良く分かっているらっしゃる。」

「お前等帰れよ。」

そんなこんなではあるが、ギラムはギラムで道を進み彼女達を奥へと案内して行った。

フィルスターも渋々付いて行くが、手にしたライフルは何時でも周りを伺う頼もしい相方なのであった。

メイド殺法でしか無い

惑星パルムでの依頼へとやって来た陽気なメイドの後に続き、ギラムはフィルスターと共に彼女の行動をしばし観察しようと先導させていた。

基本的な内容は『一定数の駆除』のため、なんだかんだで彼女が何処まで出来るのかを、ギラムは改めて確認したかった事も内容に含まれている。

フィルスターがメアンを一員として、ちゃんと認めてもらえる事。

それが根本的な目的なのだが、来た早々の突っ込みのオンパレードを見る限り、それはなかなか遠そうだ。

おまけに、こんなありさまだ。

「あぁーる日ーのポルティは～ 真ん丸ミディアムチキポルティ～♪ アッタシは一緒にーバジラを添えますよ～♪」

「ミーはそれに極上ソースー ミスターのためにとーデザートをー ファイヤでフリーズ、ショットパレーズッ！」

カカンカンッ！

「はーいっ、ごっ賞味下さいませーっ！」

「ご主人様っ！」 「ご主人さまっ！」 ※ハモリ

『うっせー・・・』

何かと敵を倒す事を『料理』というメアンは、わざわざ自作の詩を唄いながらの料理殺法を2人の前でいつも通り披露してくれた。

比較的前線に彼女が立ち、ビートを刻む様にフライパンとおたまを鳴らしながら殴って蹴っての繰り返し。

その際の際を減らす様にラズベリーがテクニクやツインハンドガンで援護をする、というのが2人の基本スタイルの様だ。

戦闘タイプも『ハンター』と『ブレイバー』なのが、さらに相性の良さを物語っている。

その後比較的殲滅に調子が乗りフォトンアーツがフィニッシュすると、まるで演技をしているかのように2人は決めポーズを取っていた。

可愛くアピールするメアンに対し、少しクールにハンドガンを構えるラスベリーとても絵になっているのだが、フィルスターには受けないご様子。

「なあ主。こんな連中を先導させて良いのか・・・？ ポルティとバジラが絶滅危惧種になりそうだけ。」

「まあそう言うなって。現に俺達は傍観者になるくらい、メアンの実力があるって事でもんだ。それに、あんなに派手に戦っておきながら隙が上手に埋められてる。いいコンビだとは思わないか？」

「そりゃそうだけどさー・・・」

相手に聞かれている聞かれていないをお構いなしに、彼は主人であるギラムに愚痴をこぼしていた。

元々こう言った連中の扱いはフィルスターは苦手であり、ギラムを引っ張りまわすエミリアにも距離を置いているほどだ。

そんな距離を再度同パーティの相手を取らないといけないという気だるさが、今の彼の悩みの種の様だ。

しかし、主人は完璧には彼の言う事に賛同はしてくれない。

元々の彼の思考がポジティブになる事が多いのもあるのだが、ギラムは考えがあってメアンを自設したパーティに在籍させた事もある。

彼もまた彼女の扱いは苦手意識を持っているが、何故か否定しようとはしない。

フィルスターにはまったくもって、否定しない理由が分からないのだ。

「第一さ、何で主はあのメイドを入れようって思ったんだ？ 最初は苦手そうに表情崩してたじゃん。」

そんな彼に対し、フィルスターは単刀直入で主人に質問をした。

何故そこまで受け入れられるのか、どうして急に思考を反転させて了解を出したのか。

半ばギラムを似た者同士として見ている面もあるため、彼は回答を気にしていた。

「ナヴァルの一件があって、アリンがまた落ち込んじゃった。俺は過去に離れ離れになったから左程ダメージは大きくなかったが、アリンからしたら心の傷はまだ完全に癒えてない。

キャストだからデータを書き返れば良いって言ったら、フィルだって怒るだろ？」

「まあ・・・」

「だからこそ、もう少し笑顔になれるような空間を造ってやりたいって思ったんだ。 多少苦笑交じりの笑顔ではあるが、メアンも一生懸命に行動している。 なら、俺はそれで良いんじゃないかねかって思ってさ。 人間はその方が良いって言うのは、俺も十分解ってるつもりだ。」
「・・・」

そんな彼からの質問に対し、ギラムは正直に考えた事を相方に話した。

今その場に居ないアリンの気分が落ち込んでいる事、別れを受け入れた自分と違い中々明るく振る舞えない事。

双方の感情が同時にやってくると、人は辛く自らの力だけでは立ちにくくなってしまう。

彼もまたその負のサイクルには直面した一時があったため、理解しているうえで何が必要なのかを考えた。

結果、彼女の様は『ムードメーカー』が必要なのではないかと、という結論に至ったのだ。

「フィルには確かに悪いと思ってるが、主人のワガママって事にしておいてくれ。 お前さんも、何時までも俺の相手ばかりじゃつまらないだろ？ お前は元々のステータスは高いんだからさ、何時だって周りの力になれると思うぜ。」

「主・・・」

「ギーラムうー フィルルー 早く早くー」

そんな2人の会話が一通り終了すると、一足先に原生生物を相手していたメアンが楽しそうに彼等と呼んでいた。

その場に居た原生生物を片づけ終わった様子で手を振っており、多少掻いた汗をハンカチで拭いていた。

「っと、雑談はこの辺だな。 多少でも良いから、俺はお前がメアンを認めてもらえれば嬉しいぜ。 今日の依頼は、その事も含めて消化したいんだ。」

「ああ、分かったぜ。 ・・・ありがとう、主。」

「ん、なんか言ったか。」

「べーつにいー」

遠くから呼んでいるメイドに軽く返事を出した後、ギラムは少し駆け足でその場を進みつつフィルスターに別の目的を言った。

それを聞いて満足したのか、フィルスターは返事をしつつ小声で彼にお礼を言った。

だが小声過ぎて聞こえていなかったため聞きなおされるも、彼は素直にその言葉を復唱しないのであった。

「おっそーいっ もう終わっちゃったよー？」

駆け足で呼び主の元へと向かうと、メアンは無邪気に言いながら軽く怒った素振りを見せた。しかし表情はまったくと言っていいほど笑顔であり、ちょっと不満がある程度の怒り方だった。ある意味可愛い、メイドのお説教である。

「悪い悪い、思った以上に仕事が早いから遅れをとっちゃったぜ。 派手に暴れまわっていたが、全然怪我とかも無いんだな。」

「これくらいなら朝飯前のレベルだよー それに、まだ目的の子に会ってないしねー？」

「目的の子？」

そんな彼女の元に軽く詫びながら向かうと、ギラムは現状の彼女の様子を見て感想を言った。どちらかと言うと初盤は『殲滅速度の観察』が目的であり、基本的に手を出すかどうかは後で考えようと思っていたほどだ。

その必要性が無いくらいにギラムに仕事が無かった事も含めて、彼は軽く褒めていた。相手からの賛辞を受け胸を張りつつメアンは言うも、目的の相手が居る様子でまだまだ疲れてなどいられないと言っていた。

依頼先を来る前に言っただけなのに、いつの間にか別の依頼を受けていたのだろうかと思い、彼は誰を探しているのかと質問した。

「ここ、ローゼノムシティでしょ？ だったら、とっくじょうの素材のゲットをするチャンスじゃん！ アタシ毎回使ってるんだー 『ガインゼロス』の卵～」

「卵！？」

「んなもん料理に使うなよ・・・ 原生生物から採れた素材なんて使ってたのか、お前。」

どうやら目的の相手は『ガインゼロス』という大型の原生生物の様で、その敵から採れる『卵』が目的の様だ。

一般的な傭兵からしたら食べられる物として認知されない原生生物の副産物であったが、実際には認知以上に価値のある代物の様だ。

「え、ギラム知らないのー？ ガイノゼロスの卵って、有名なホテルのディナーでも使われる超々高級食材の1種じゃーん。 いやだなーもうっ」

「ちなみにマジのニュースだけ、ミスター」

「そ、そうなのか・・・」

軽く小馬鹿にされるように言われるも、相方のラスベリーに補足を入れられ真実の情報である事を告げられた。

あまりその類の話を受けないギラムにとって驚きの連続ではあるものの、気にしても彼女の事であり『止める事は無いだろう』と思いなおすしかなかった。

というよりも、そうしなければ永遠と料理の知識を与えられそうな雰囲気でもあった。

「さあー、一応メモの座標を元にする、この先に居るはずだよー レッ」

「ちょっと待ちな。」

「ツうう？ どしたのーギラム。」

そんな彼女の知識を軽く鵜呑みにすると、メアンは目的の敵がいるであろう場所へと向かおうとした。

しかしそんな彼女をギラムは声をかけ制止させ、その前に何かやる事がある様子で手にウォンドを握っていた。

「とりあえず、無傷って訳でもなさそうだからな。 手当してやるから、その後に皆で行こうな。」

「えっ？ ……あつ、本当だー 全然気づかなかったっ」

「だろうな。」

振り返った彼女の太ももには小さな筋が入っており、出血とまではいかない軽い擦り傷を彼は目にした様だ。

手当てをしてやると言いギラムは短杖の先端を彼女の傷へと向け『レスタ』を発動し、彼女の外傷を瞬く間に直してしまった。

おまけに近くに居たラスベリーの腕に付いていた外相も消し終えると、彼は短杖を消し再びツインダガーを手にした。

「おおーっ、綺麗に治っちゃった。 ギラムって、テクニックも使えるんだねー」

「一応基本のテクニックだからな。 さ、行こうぜ。」

「はい。」

自身の傷跡が瞬く間に治ってしまった事に驚くも、ギラムは軽く褒め言葉を受けつつ彼女の先導を取る様に歩き出した。

その後をメアンが楽しそうに続き、ラズベリーとフィルスターも同様に彼の後に着いて行くのだった。

無双メイドでしか無い

惑星パルム内にあるローゼノムシティへとやって来たギラム達は、依頼内容である『増え過ぎた原生生物』の駆除を行っていた。

大半はメアンの佳麗(かれい)なるメイド殺法によりお亡くなりになったが、それでもまだまだ量が多い。

一度暴走気味な彼女を止め傷の手当てをした後、再度歩き出した頃には再び落ち着きを取り戻し4人での駆除活動を再開していたのだった。

ピッピッピッ

「・・・ん、そろそろ指定された範囲内になるぜー」

「じゃあ依頼はこれで終わりだな。ご苦労さん、3人とも。」

「おっ疲れ様で一すっ」

計測していた数値を入力し指定された値まで達した事を確認すると、フィルスターは主人であるギラムに報告をした。

それを聞いた彼は構えていた武器をしまいつつ後方にいたメアン達にもその事を伝え、依頼が終了した事を皆で確認した。

半ば1人で頑張っていたに等しいお転婆メイドはと言うと、まだまだ元気なご様子。

「そういや、なんか目当ての原生生物が居るって言ってたが。あっちは良いのか？」

「あっ、出来たらアタシは倒したいなーなんて思ってるんだけど。ギラムう、付き合ってもらっても良いー？」

「それくらいなら構わないぜ。フィルも良いか。」

「ん、別にー」

「じゃあ決まりだな。ポイントはもう少し先だったか？」

そんな彼女の様子を見たギラムは、先ほどの話で『彼女に別の目当てがある』という話を思いだし、その事はどうするのかと問いかけた。

するとメアンは少し遠慮がちに言いながら、フライパンを掌で器用に回しつつ返事を待っていた。

軽く重いと思われる武器をクルクルと回す姿は、さながらバトンを回すチアリーダーである。

ちなみに、彼女にその経歴は無い。

皆に行っても良いかと聞き話がまとまると、ギラムはそう言いメアンに指定のポイントの確認を取った。

「そうそうー …… あっ！ 居たー☆」

話をするや否や何を言うかと思うと、彼女は軽く指さした先にはお目当ての『ガイノゼロス』の後頭部がちらちらと見えていた。

彼等の居る位置から少し下へと下った場所に住処がある様子で、相手からは彼等の姿は見えていない。

「じゃあ、俺等が気を引くから。 そのうちにメアンは卵を」

タンッ！

「ガイノゼロスウー！！ 覚悟おおー☆☆☆」

「かいしゅ …… あっ、おい！！！」

相手の様子を見て罠を用意しようと言い出したのも束の間、彼女はギラム達の居た場所から走りだし、相手の居る場所までの高低差さえも気にせず空へと飛び出した。

そんな彼女の様子を見たギラムは慌てて止めようとするも一足遅く、すでに彼女は地面を蹴りガイノゼロスの後頭部へ向けてダイブを開始していた。

【！！】

彼等の声を聞き気配を悟ったのか、後頭部のみ見えていたガイノゼロスの頭が動き、彼女の姿をとらえた。

しかし、

「みやびいいーん …… **キックッ！！**」

ドゴスッ！

【グルウォアアッ！！】

宙へと飛び出したメイドからの飛び膝蹴りが顔面に命中し、敵は綺麗に吹き飛んだ。
一瞬宙へと飛んだ姿もギラム達の場所からは確認ができ、すでにメアンが先制攻撃をかましたの
だろうと思いギラムとフィルスターは呆れながら額に手を置いた。

「何だよ『みやびんキック』って・・・」

「マスター曰く『雅(みやび)な体制、すなわち上品の基本となる【正座】の体制を駆使し、華麗にかつ優雅に相手をおもてなしする基本の作法である』と、言っていたな。アクションでは『飛び膝蹴り』に変わりはないがなっ」

呆れるギラムへの配慮なのか、ラスベリーは彼女の繰り出した技へ対する解説を懇切丁寧に話した。

彼女も単に口だけの『メイド修行』は行っておらず、日々研究と実技の向上を目指して頑張っている。

そのため『清楚・可憐・上品』と言ったメイドに必要な事柄に関する情報はラスベリーと共に調べ、そして独自の技術に織り交ぜられないだろうか。

と、考えた末に編み出された『飛び膝蹴り』が『雅キック』である。

ちなみにこの蹴り技のモデルとなった人が居る様だが、その辺はラスベリーは教えてくれなかったそう。

「言うだけ無駄なんだろうけど、全然礼儀作法じゃねえー」

「さて、そしたらミーもマスターに続くとするかな。 **Show, TIME!!!**」

バツ！

そんな解説を織り交ぜ終わると、ラスベリーも戦いに参戦する発言と共にツインハンドガンを構え空へと飛び出した。

上空に映った白龍の姿がガイノゼロスの目にも映り、転倒していた敵も牽制しようと起き上が

った。

「ベリリーッ、やっちゃえええ〜！」

「Ok マスター！ スコールのお見舞いだっ！」

気分が共にハイになった様子でメアンはラスベリーに言うと、飛び出したラスベリーは返事を返し引き金を何度も敵に向けて引いた。

双銃からは幾多の弾丸が発砲され、まるで雨を降らすかの如く彼は相手に向けて銃を乱発した。その際メアンは相手との距離を取りつつ武器を取り換え、フライパンから巨大な長槍『デモニックフォーク』を持ち出した。

軽く両手で槍を構えた後頭上で数回槍を回転させると、彼女はフォークを構え相手に向けて特攻を仕掛けた。

「いっくよー！！」

【！！】

そんな彼女の声を聞いた敵は慌てて彼女に両手を向け、先端からテクニックを発射させた。

相手の動きに怯まず彼女は攻撃を避ける様にフォークを地面に差すと、高跳びの要領でフォークをしならせそのまま空へと飛び出した。

濃い藍色のメイドが再び空へと飛び出すと、敵は動こうにも動けず彼女の姿を目に捕えていた。

「今日は超ハイテンションなんだから、思い出に残る一発。 おみまいしまーすっ！」

再び空へと飛びだし視界に映る空と大地が反転する中、メアンは笑顔でガイノゼロスにウィンクを飛ばした。

その後手に別の武器を持ちだし、自称包丁の『イルギル・テストメント』を両手で持ち構えた。

「マスター！ フィニッシュだ！！」

「OKベリリーッ！ ひっさあああ一つっ！」

相方のラスベリーからの声もかかり彼女は返事を返すと、空中で身体を曲げその場で大回転し出した。

構えていた斧の先端が徐々にガイノゼロスの頭へと向けられると、彼女は回転を止め一気に振り

下ろした。

そして、

「大魚も真っ青の・・・一刀両断！ 背骨折りいー♪」

ガァアスンッ！！

相手も大地も木端微塵になりそうな大打撃と共に、彼女は必殺技を放つのであった。

音に見合う成果も彼女の目の前に広がっており、一刀両断されたガイノゼロスは消え失せ、鎌の突き刺さった部分は瓦礫が飛び散りミサイルでも落ちたかのようにくぼみが出来上がっていた。とても傭兵の仕事を行っていない『自称メイド』の放つ威力とは思えないほどの、大打撃であった。

「・・・すげえ有様だな。」

そんな2人が行動を締め終えた頃、ギラムはフィルスターと共に別ルートで彼女達の元へとやってきた。

しかしその頃にはガイノゼロスは消え失せ、メアンの目的の品である卵がすでに採取された後であった。

何と言うか、彼の出番は今回は無かったに等しい。

「ギラムみてみてー！ 卵、大量だよーっ♪」

「わかったから、んなもん持ってうろうろするな。服汚れるぞ。」

「だーいじょうぶっ ちゃーんと、帰ったら洗浄して綺麗になってから食材をあつかうもーん。」

「何もわかってねーな。」

目的の物が見つかり燥ぐ彼女をギラムは宥めるも、まだまだ彼女の気分は落ち着かない。

フィルスターが軽く突っ込みを入れるもメアンは卵を転送するのに大忙しであり、ラズベリーが隣で補助をする姿を主人と共に見守るしかなかったのだった。

「主、俺決めた。」

「ん？」

「アイツ、もう何言っても俺等の所から出て行きそーにねえし、俺が諦める。こーんな連中
でも、なんだかんだで熱中出来る事に対しては夢いっぱいなんだなーって思ったからさ。」

そんな2人を見て、フィルスターは眩き混じりにギラムへ向けて答えを告げた。

最初は嫌々で面倒過ぎる連中だと思っていたが、なんだかんだで依頼を終える頃には派手なショーも見せてくれた。

無論彼が望んでしてもらった事ではないのだが、それでも彼なりに得る物があった様だ。

「・・・そっか。良かったぜ、仲良く出来そうでき。」

「でも、晩餐会だけは行かねーからな。」

「はいはい。」

根本的な所は何も変わらないものの、フィルスターはそう言いギラムの肩の上に登った。

その後2人でニッと笑うと、メアンとラスベリーと共にリトルウィングへと戻って行くのだった

。

こうして、新しいパーティメンツ。

お転婆メイド『メアン・スムロ』と、その相棒『ラスベリー』が入隊するのであった。

－ E P I S O D E E N D －